

思いを聴き取ることは得意かもしれない、とっていたけれど

フリーランスナース

大澤 智恵子

『「寝たきり老人」のいる国いない国』は、私が医療から福祉へシフトを変えるきっかけとなった本でした。この本は、タイトルを見ただけで手にしてしまう不思議な魅力がありました。歳をとって最期を迎える時、寝たきりになるのが当然と思っていた私は、寝たきり老人がいない国ってどうゆうこと？ と興味を持ったのです。この時点で、ゆきさんの発信力は読者にストレートに伝わっていたのです。もちろん、内容は、タイトルの期待通り、一気に読み終えてしまいました。読み終えた時、「今のままではいけない。自分も何か出来るのではないか？」何か、わからないけれど、不思議に心は弾んでいました。そして、いつしか訪問看護師として在宅医療に携わり、今に至っています。

今回の授業は、この本を書いた、ゆきさんの「発信力を高める」でした。ジャーナリズムを学ぶ者にとって、絶対に外せない内容です。そして、実は、私の一番苦手で弱い部分なのでした。パソコンが苦手というトラウマです。こうしたい。ああしたいという思いはあっても、写真をうまく使えなかったり、グラフや表にすることができなかったり、レイアウトがうまくできなかったり、表現する時に技術的に劣っている部分が多くあるのです。分かっているのなら、勉強して出来るようになればいいのに、それも腰が重い。わかっているけど、手がかからないのです。それは、高校生の時のことでした。商業高校では約40年前からコンピューターの授業がありました。機械は正直です。いい加減な性格の私は、案の定、前に進めません。赤点を取り、追試、再追試。やっと、お情けで合格を頂いた苦い思い出があります。その日から「もう機械は嫌だ！」と拒否反応が出てしまいました。こんな私が、ジャーナリズムを選択したのは書くことが好きだったからです。好きなだけで力があるわけでない事は、自分が一番わかっているのですが。

救いは、ゆきさんがレジメで挙げられていた「5つの目」の重要さでした。

虫の目・鳥の目・歴史の目、疑う目、声を出せない人の目。

こんな私でも何か強みはないのか？好奇心は強い。なぜ？と疑う事が自然。思いを伝える事が苦手な方の声を聞く、思いを聴き取ることは得意かもしれない。と正直、思っていました。

ところが、「互いにインタビュー」のゼミで、ゆきさんから「何故、この課題を出したかわかりますか」と問われ、「インタビューされる身を体験してほしかったから」と聞いて、ハッとしました。患者さん中心の医療や・看護をするといつも口にしながら、気がついたら、今回のインタビューでは、聞かれる方の事はまったく考えておらず、インタビュアーとして、いかにうまく聞くか？いかにうまく表現するか？いかにうまく伝えるか？といった自分中心で事を進めていたことに気がつきました。これでは、自分の強みとっていた点も、実は「独りよがり」でした。

もう一度、相手の立場になって聴くこと。相手の事を考えて表現すること。事実をきちんと伝える事。そして、そのためには、苦手なことも克服しなければ・・・と新たに思いを強くしました。